

▲構圖的傾向と製作

至らぬところ

黒田清輝氏談

作畫に於いても大した變りはない、たゞ不思議なのは顔料やカンパスが高値たかいので定めて小さいものが多からうと思つたのに、いつもより大作の多かつた事である、昨年からの

▲文部大臣の 特別の訓示からか、構圖に苦心する傾きが現れ思想にも寫生を離れて何ものかを現はさんとする傾向が見えて來た、即ち昨年に較べて構圖的傾向は現はれて來てゐるが、それが十分な製作とまでは成つてゐない様である、スケッチなどにしても引立つたものが多いがまた本統の製作となつてはゐないやうである、その爲めに遺憾乍ら

▲多數の落選 を見た譯である、これは確かによい傾向であると云はねばならない、しかし構圖とか描寫とか云ふと、いかにもクラシックな一流派の目で鑑査したかのやうに誤解されるかも知れぬがそんな事は決してない、各種類の流派の繪が入選してゐるし、いろんな□た

▲ねらい所を 尊重してある、これは入選畫の事實について見て貰ふより外はない。

『読売新聞』大正七年一月二〇日

第二回文展(大正七年一月四日〜二月二〇日)をふまえての所感。